

心理面接における動的家族画・家族イメージ法の活用 — 課題の非構造的・半構造的特徴に注目して —

原田 雪子¹⁾

石田 弓²⁾

内海 千種³⁾

Study on the use of Kinetic Family Drawings and Family Image Test in the psychotherapy: Focusing on the theme which has non-structural stimulus or half structural stimulus.

Yukiko HARADA¹⁾

Yumi ISHIDA²⁾

Chigusa UCHIUMI³⁾

Abstract

In this paper, to clarify the use of Kinetic Family Drawings (KFD) and Family Image Test (FIT) in the psychotherapy, family's characteristics that both techniques were made to notice were examined by focusing on the difference of the stimulation structure. As a result, there is no difference in the matter noticed about "family members' characteristics", "relations of family members", and "episodes concerning a family" as for KFD and FIT. Therefore, it has been understood to be able to notice these matters even by each technique in the psychotherapy. It is easy for FIT with half structural stimulus to notice specific family feature. It is easy for KFD with non-structural stimulus to notice about various matters of the family from the past to the future.

Moreover, the difference of feature of the family interpreted by KFD and FIT was clarified, and the possibility as the test battery was examined. As a result, it is easy for KFD with non-structural stimulus to understand concrete family feature in various situations. On the other hand, it was clarified that family's basic characteristic was understood by FIT with half structural stimulus. Therefore, the method for the commentary use of both techniques was suggested. For instance, FIT can be effectively used to understand family's basic characteristic, and KFD is more effective to understand a detailed feature and the originality of the family.

Key words: 動的家族画, 家族イメージ法, 心理面接, 家族力動, 家族システム

1) 医療法人おくら会藤戸病院 Fujito Hospital

2) 広島大学大学院教育学研究科附属心理臨床教育研究センター Training and Research Center for Clinical Psychology, Graduate School of Education, Hiroshima University

3) 徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima

I 問題と目的

1. 家族をテーマとした心理面接の特徴

心理臨床場面では、家族のテーマが展開されることが多い。それは、ある個人の悩みや問題はその人を取り巻く人間関係の影響を少なからず受けているからである。特に家族関係は性格、価値観、感情、行動など、個人のあらゆる面に大きな影響を及ぼしている。

家族の問題を取り上げる場合、家族関係の問題に直面しなくてはならない。しかし、心理面接の中で問題に直面することは時として難しい。植村(1989)は、その難しさについて以下のように述べている。

現実問題として、家族の中に潜んでいる心的問題について保護者と話し合うことは難しい。(中略)故意に話をそらしてしまうことが多い。これは、担任と保護者との間に十分なレポートが形成されていないこと、保護者の方に防衛機制が働いていること、などが考えられる。下手に話を持ちかけると、かえって逆効果になってしまう恐れがある。不用意に心の領域に足を踏み入れることは、非常に危険なことである。しかし、危険だからといって手をこまねいているとさらに大きな問題が引き起こされる恐れがある。

このように家族関係に焦点を当てようとした場合に、クライアントは意識的・無意識的に家族関係を取り上げることが回避することがある。このような場合、心理面接の補助手段として用いられる技法に動的家族画(Kinetic Family Drawings: KFD)がある。これまで医療、教育、福祉など様々な心理臨床場面で用いられ、家族関係のアセスメントに有用であることが示されてきた。一方、近年注目されている家族システム論の観点から作成された家族イメージ法(Family Image

Test: FIT)も心理面接の補助手段としての有用性が報告されている。

2. 動的家族画と家族イメージ法の相違点 - 課題の内容、理論的背景 -

KFDは家族に関する心理アセスメント法として日比(1973)によって日本に紹介された臨床描画法である。「あなたを含めて、あなたの家族のみんなについて、何かしているところを絵に描いてください」と教示され、A4判の画用紙に鉛筆または色鉛筆で描かれる。そして、人物像の特徴や行為の内容、描写された事物から対象者のとらえている家族像が解釈される。また、心理面接の中では、クライアントは描画に自己概念に関するものを投射し、対人関係の領域における感情が引き出されるとされている(Burns & Kaufman, 1972)。

一方、FITは家族アセスメント法や心理的援助のためにKveback(1980)が開発したFamily Sculpture Techniqueを亀口ら(1988)が日本の家族向けに修正した技法であり、改訂を重ね、現在の形式となった(亀口, 2003)。対象者は作成前に「シールの色」、「シール間の線」、「シールの向き」のもつ意味を伝えられ、15cm×15cmの枠内に家族成員を表す円形シールを配置することで、対象者がイメージしている家族像を二次元平面に表現するように教示される(図1, 表1)。また、「シール間の距離」や「シールの高さ」についての教示はないが、これらには無意識的な家族力動が投射されると考えられている。FITは心理アセスメント法としての研究が進んでいるが、心理面接のなかでは、家族メンバーがそれぞれFITを行い、完成した家族イメージを家族メンバー同士で確認しあうことで、家族関係の変容を促すという面接の補助手段として用いられた事例も報告されている。

KFDとFITでは、その理論的背景に違いがみられる。KFDはBurns &

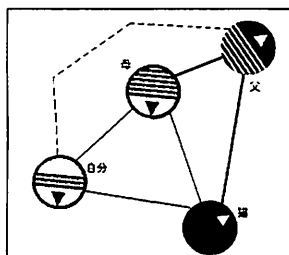


図1 FITの作成例

表1 FITの各項目がもつ意味

シールの色(5段階)	パワー(発言力・影響力・元気のよさ等)
シールの向き	・内向き→家族に関心が向いている ・外向き→家族以外に関心を向けている
シール間の線(2段階)	2者間の心理的結びつきの強さ
シール間の距離(1mm単位)	2者間の心理的距離
シールの高さ(3段階)	家族内での地位

Kaufman (1970) によって考案されたものであり、精神分析学の観点から描画の解釈が行われている。また、日比(1986)はKFDの解釈をLewin, K.の場の理論に求め、自分自身を含んだ家族関係に対する対象者の認知の構えに焦点を当てている。

一方、FITは家族療法における家族システム論の観点から作成されている。亀口(1988)によると、家族内相互作用を家族システム全体の力動的視点からとらえるために、家族内対人関係を外在化する判断基準として、家族成員間の心理的距離に注目し、各家族メンバーの家族に対する認知の変化をとらえる手段として開発された。そのため、家族メンバーのパワーや家族メンバー間の心理的距離など、家族システムの観点から解釈が行われる。

3. 動的家族画と家族イメージ法によって生じる気づき

KFDの課題(教示)は自由度が高く、非構造的な刺激であるといえる。そのため対象者が表現する家族イメージは幅広く、各家族の独自性が表現されやすいことから、家族に関する気づきも幅広く多様なものになると考えられる。

一方、FITには「シールの色」がもつ意味のように教示される項目と、「シール間の距離」がもつ意味のように教示されない項目があることから、半構造的な刺激であるといえる。そして、クライアントは家族の捉え方を家族のパワーや心理的距離といった概念にまとめることで、自らの家族イメ

ージの特徴を読みとることも可能である。しかし、家族イメージの表現される幅はKFDよりも狭く、限定されている。

こうした刺激構造の違いから、KFDとFITの作成過程や作成後に得られる家族に関する気づきには、相違があることが推察される。例えば、KFDでは非構造的な刺激によって気づきが広がりやすく、多岐に渡ると考えられる。一方、FITは半構造的な刺激であるため、対象者の気づきもある程度限定されたものとなる可能性がある。このようにKFDとFITによる気づきについて整理することは、セラピストがクライアントに何らかの家族に関する気づきを促すことを目的にKFDやFITを用いる際に役立つと思われる。しかし、これまでの研究ではKFDとFITによって得られる気づきの性質については明らかにされていない。よって本研究では、KFDとFITによってもたらされる気づきの特徴を整理することで、心理臨床場面におけるKFDとFITの活用法について検討することを目的とする。

4. 心理アセスメント法としての動的家族画と家族イメージ法の違い

刺激構造の違いがあることから、KFDとFITからセラピストが読みとることのできるクライアントの家族の特徴にも違いがあると思われる。KFDでは具体的な状況が描かれることにより、表情や家族の雰囲気など具体的な家族の特徴を読みとることができると思われる。一方、FITでは半

構造的刺激によって家族イメージが比較的簡易にまとめられるため、セラピストは基本的な家族力動を読みとることができると考えられる。このように表現される家族の特徴に違いがあるとすれば、両技法の特徴を活かしてテストバッテリーとして使用することも可能であると推察される。しかし、両技法をテストバッテリーとして用いる試みについては研究されていない。よって本研究では、KFDとFITから読みとることのできる家族の特徴の異同を明らかにし、テストバッテリーとしての可能性についても検討することを目的とする。

5. 本研究の目的

本研究では、KFDとFITの刺激構造の違いに注目し、心理面接における活用法を明らかにするため、以下の2つの研究目的を設定した。まず、KFDとFITによってもたらされる気づきの特徴を整理することで、心理臨床場面におけるKFDとFITの活用法について検討することとした(目的1)。次にKFDとFITから読みとることのできる家族の特徴の異同を明らかにし、テストバッテリーの可能性について検討することとした(目的2)。

II 方法

1. 対象者

A大学の学部生、大学院生30名(男性13名、女性17名)。

2. 調査内容

1) KFD

「今からあなたを含めて、あなたの家族が何かをしているところを描いてもらいます。どんな場面でもかまいません。絵の上手下手は関係ありませんので、自由に描いてください」と教示し、A4判の画用紙に4Bの鉛筆を使用して描かせた。

2) FIT

亀口(2003)が作成したFIT用の

検査用紙とシールを用いた。検査用紙に書いてある手続きを対象者に読ませ、随時作成させた。

3) 気づきに関する自由記述式質問紙

家族に関する気づきについて自由記述形式で回答させる質問紙を作成した。記述させる家族は、同居・別居に限らず、対象者の親、きょうだいに当たる家族メンバーに限定した。

3. 手続き

調査は対象者1名に対して2回(1回45分~90分)行った。1回目は対象者にKFD(またはFIT)を5分~30分で作成させた。その後、KFD(またはFIT)の作成中や作成後の気づきについて質問紙に回答させた。2回目は1回目の調査から2週間以上の間隔を開けて実施した。まず、対象者にFIT(またはKFD)を5分~30分で作成させ、その後、FIT(またはKFD)の作成中や作成後の気づきについて質問紙に回答させた。カウンターバランスを取るために、対象者の半数は1回目にKFD、2回目にFITを行い、残りの対象者には、逆の順番(FIT→KFD)で行った。

III 結果

1. 動的家族画と家族イメージ法による気づきの分類

KFDとFITの作成中や作成後に得られる対象者の気づきの異同を明らかにするため、自由記述の内容を分類した。分類は評価基準が明確な場合には筆者が行ったが、筆者の主観が評定に影響しやすい場合には、臨床心理学を専攻している大学院生2名に評定を依頼した。

1) 「家族メンバーの特徴」について

「家族メンバーの特徴」に関する気づきについて分類を行った。これは家族メンバーの性格や行動、外見などに関する気づきが記述されているものとした。KFDとFITの「家族メンバーの特徴」を分類し(図2, 3), その

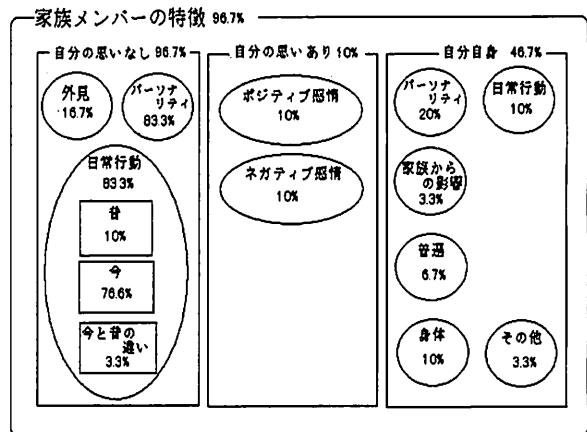
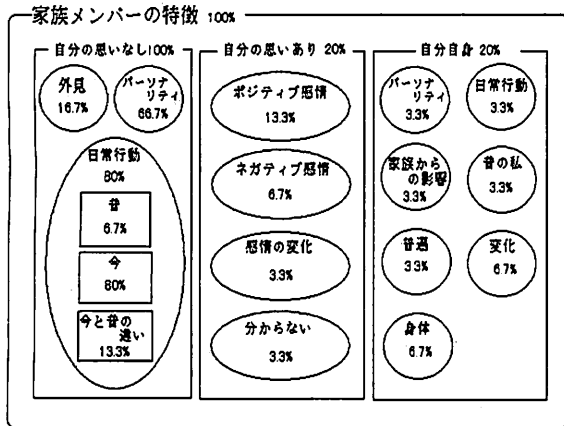


図2 KFDにおける「家族メンバーの特徴」への気づき

図3 FITにおける「家族メンバーの特徴」への気づき

表2 「家族メンバーの特徴」の下位分類の用語についての説明

「自分の思いなし」				
自分以外の家族メンバーについて記述しているが、そのことに対する自分の思いは記述されていないもの(例: 休日、父はソファで寝ていることが多い)				
「外見」	「パーソナリティ」	「日常行動」		
家族メンバーの外見について記述したもの	家族メンバーのパーソナリティについて記述したもの	家族メンバーが日常生活で見せる行動について記述したもの		
		「昔」	「今」	「昔と今の違い」
		昔の日常行動について記述したもの	現在の日常行動について記述したもの	昔と現在の行動の違いについて記述したもの
「自分の思いあり」				
自分以外の家族メンバーの特徴についての記述と、それに対する自分の思いが記述されたもの(例: 母はいつも私の心配をしている。私はちょっと嫌だと思ことが多い)				
「ポジティブ感情」	「ネガティブ感情」	「分からない」		
家族メンバーの特徴に関して、ポジティブな感情について記述したもの(例: うれしい)	家族メンバーの特徴に関して、ネガティブな感情について記述したもの(例: うっとうしい)	自分の感情を「分からない」と記述したもの(例: なぜあんなに一生懸命なのか分からない)		
「自分自身」				
対象者自身の特徴について記述したもの				
「パーソナリティ」	「日常行動」	「家族からの影響」	「昔の私」	
対象者のパーソナリティについて記述したもの	自分が日常生活の中で行っている行動について記述したもの	自分の特徴に関して、家族からの影響を記述したもの(例: 私の性格がまじめなところは、母に似ていると思う)	以前の自分について記述したもの(例: 小さい頃の私は活発でいろんな人に迷惑をかけていた)	
「自分自身」				
「普通」	「変化」	「身体」	「その他」	
以前の自分と現在の自分の変化がないことについて記述したもの(例: 私がよくしゃべるところは昔から変わっていない)	以前の自分と現在の自分の変化について記述したもの(例: 昔の私は落ち着きがないとよく言われたが、今は大人しいと思う)	自分の身体面について記述したもの(例: 私はよく風邪を引き、身体が弱かった)	他の分類に当てはまらないもの	

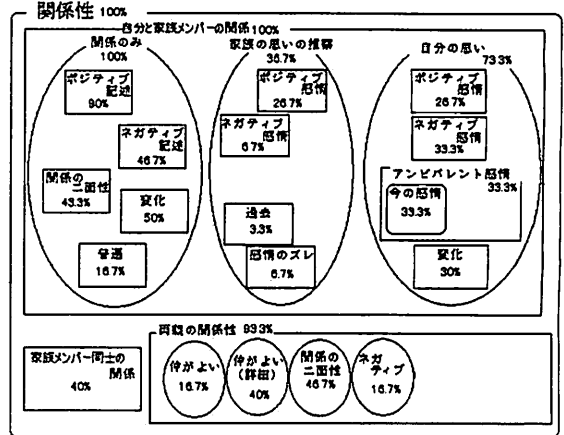
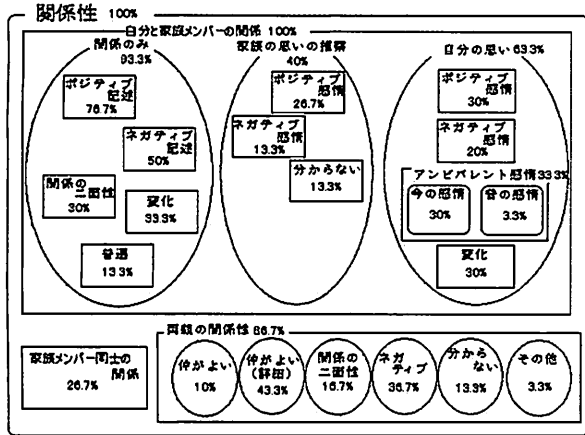


図4 KFDにおける「関係性」への気づき

図5 FITにおける「関係性」への気づき

表3 「関係性」の下位分類の用語についての説明

「自分と家族メンバーの関係」				
対象者と家族メンバーの関係について記述したもの				
「関係のみ」				
関係性について記述されているが、対象者や家族メンバーの感情は記述されていないもの(例: 私と姉は仲がいい)				
「ポジティブ記述」 関係性に関してポジティブな内容について記述したもの	「ネガティブ記述」 関係性に関してネガティブな内容について記述したもの	「関係の二面性」 関係性のポジティブ、ネガティブの両側面について記述したもの(例: 弟と私はけんかしたときは全く話さないが、普段は趣味のことでよく話をする)	「変化」 以前と現在の関係性の変化について記述したもの	「普遍」 以前と今の関係性の共通点について記述したもの
「自分と家族メンバーの関係」				
「家族の思いの推察」				
関係性の記述とともに自分以外の家族がどう思っているかに関する推察について記述したもの(例: 妹はうっとうしいと思ってるだろう)				
「ポジティブ感情」 自分以外の家族メンバーのポジティブな感情を推察して記述したもの	「ネガティブ感情」 相手のネガティブな感情を推察して記述したもの	「分からない」 家族メンバーの思っていることが分からないと記述したもの	「過去」 以前の相手の感情を推察して記述したもの	「感情のズレ」 自分と相手の感情のズレについて記述したもの
「自分と家族メンバーの関係」				
「自分の思い」				
関係性に関する自分の思いについて記述したもの(例: 私は父に遊びにつれて行ってもらうことが楽しみだ)				
「ポジティブ感情」 関係性に関してポジティブな感情について記述したもの	「ネガティブ感情」 関係性に関してネガティブな感情について記述したもの	「アンビバレント感情」 関係性に関して2つの相反する感情について記述したもの	「変化」 以前と今の感情の変化について記述したもの	
		「今の感情」 現在のアンビバレント感情について記述したもの	「昔の感情」 以前のアンビバレント感情について記述したもの	
「家族メンバー同士の関係」				
自分を除く家族メンバー同士の関係について記述したもの				

下位分類における用語を表2で説明した。

「家族メンバーの特徴」についての気づきは、KFD, FITともにほぼ全員が記述していた。下位分類においても「自分の思いなし」では、両技法ともほぼ全員が気づきを得ていた。「自分の思いなし」の下位分類の中で比較的多数が記述していた項目は、KFD, FITともに「パーソナリティ」と「日常行動」に関するものであった。「自分の思いあり」について記述していた対象者は、KFD, FITともに少数であった。「自分自身」に関しては、FITではほぼ半数が気づきを得ていたが、KFDでは半数に満たなかった。「自分自身」についてさらに細かく分類を行ったところ、自分の「パーソナリティ」ではKFDよりもFITの方が多く記述されていた（KFD3.3%, FIT20%）。

2) 家族メンバー同士の「関係性」について

家族メンバー同士の「関係性」に関する気づきについて分類を行った。KFDとFITの「関係性」を分類し（図4, 5）、その下位分類における用語を表3で説明した。

「関係性」に関しては、KFD, FITともに全員が記述していた。「関係性」の中でも「自分と家族メンバーの関係」では、両技法とも全員が記述しており、その中でも「関係のみ」に分類されるものが多かった（KFD93.3%, FIT100%）。また、「関係のみ」の下位分類では、両技法ともポジティブな関係性が記述されたものが多かった（KFD76.7%, FIT90%）。「自分と家族メンバーの関係」の下位分類である「家族の思いの推察」について記述しているものは、両技法とも多くなかったが、ほぼ同数であった（KFD40%, FIT36.7%）。「家族の思いの推察」の下位分類では、KFDにおいて「分からない」という項目が作成されたが、FITではみられなかった。「自分と家族メンバーの関係」の下位分類である「自

分の思い」では、両技法ともほぼ同数であり（KFD63.3%, FIT73.3%）、下位分類にも差はみられなかった。「両親の関係」については、多くの対象者が両技法で記述していたが（KFD86.7%, FIT93.3%）、下位分類の「関係の二面性」と「ネガティブ」の項目には違いがみられた。「関係の二面性」については、KFDでは16.7%しか記述していなかったが、FITでは約半数（46.7%）が記述していた。「ネガティブ」では、KFDで36.7%が記述していたが、FITでは16.7%しか記述していなかった。

3) 「家族に関するエピソード」について

「家族に関するエピソード」についての気づきを、対象者が現在エピソードをどのように捉えているかを中心に分類した。KFDとFITの「家族に関するエピソード」の分類を示し（図6, 7）、その下位分類における用語を表4で説明した。

「家族に関するエピソード」については、KFD, FITともにほぼ同じ分類となり、自らの教訓や経験となったエピソードについての記述（「学んだこと」、「これから先〇〇したい」）が多かった。また、「感謝」がKFDよりもFITでやや多くみられた（KFD3.3%, FIT16.7%）。

4) その他の分類

「家族メンバーの特徴」、「関係性」、「家族に関するエピソード」以外に作成された分類項目の中で特徴的な分類についての結果を記述した。

「家族全体の特徴」（対象者の家族全体の特徴についての記述）では、KFDよりもFITの方が記述しているものがわずかに多かった（KFD76.7%, FIT93.3%）。その下位分類では、家族「全体」（家族全体の特徴をまとめて記述しているもの。例：「私の家族はうるさい」）の「変化」（以前と現在の家族の特徴の違いを記述しているもの。例：「私の家族は以前よりも静か

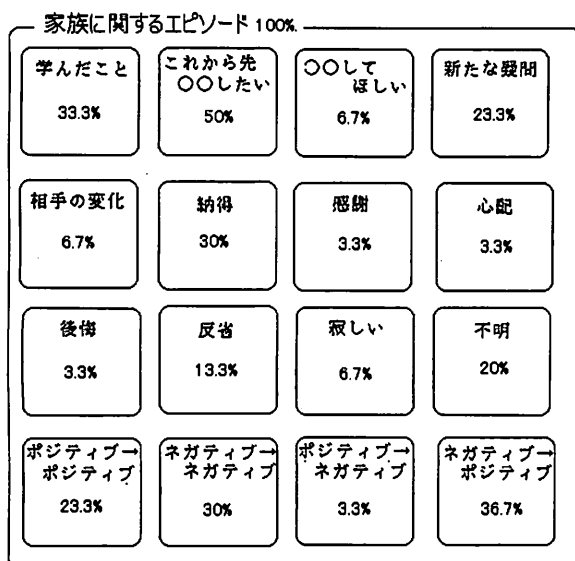


図 6 KFDにおける「家族に関するエピソード」への気づき

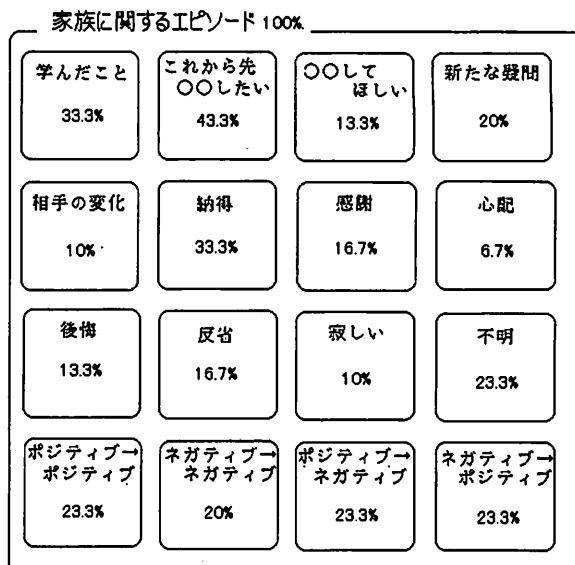


図 7 FITにおける「家族に関するエピソード」への気づき

表 4 「家族に関するエピソード」の下位分類の用語についての説明

「学んだこと」 エピソードを通して新しく学んだことについて記述したもの	「これから先〇〇したい」 エピソードを通して自分がこれから先どうしたいかについて記述したもの	「〇〇してほしい」 エピソードに携わった相手に対しての要求を記述したもの	「新たな疑問」 エピソードについての疑問を記述したもの(例:「なぜ自分はあんなことを言ったのだろう」)
「相手の変化」 エピソードの後、エピソードに携わった相手が変わっていることを記述したもの	「納得」 エピソードが起こったことに関して納得しているもの(例:あのときはそうするしかなかったと思う)	「感謝」 エピソードを通して家族に対する感謝を記述したもの	「心配」 エピソードに携わった相手を心配しているもの
「後悔」 エピソードに関する心残りを記述したもの	「反省」 エピソードが起こった当時の自分の行動を反省しているもの	「寂しい」 今後同じようなエピソードがもう二度とないことに対する寂しさと記述しているもの(例:もうこんなことは二度とないと思うと寂しい)	「不明」 感情が記述されていないもの
「ネガティブ→ポジティブ」 以前はネガティブな感情を持っていたが、現在はポジティブに捉えているもので、あまり深く記述されていないもの(例:当時は悲しかったが、今はよかったです)	「ポジティブ→ネガティブ」 以前はポジティブな感情を持っていたが、現在はネガティブに捉えているもので、あまり深く記述されていないもの(例:当時はよかったです、今は寂しいと思う)	「ネガティブ→ネガティブ」 以前も今もエピソードをネガティブに捉えているもので、あまり深く記述されていないもの(例:当時は悲しかった、今も悲しい)	「ポジティブ→ポジティブ」 以前も今もエピソードをポジティブに捉えているもので、あまり深く記述されていないもの(例:当時はうれしかった、今もうれしい)

になった)の項目で、FITでは3.3%、KFDでは16.7%が記述していた。「家族内での家族メンバーの位置づけ」について記述していたものは、両技法ともに同数であった(KFD86.7%、FIT86.7%)。その下位分類では、「自分」(家族の中での自分の位置づけについて記述しているもの)の中の「行動」(家族の中での自分の位置づけについて行動を中心に記述しているもの)において、FITでは6.7%、KFDでは26.7%が記述していた。また、「自分」の中の「ネガティブ」(家族の中での自分の位置づけについてネガティブに記述しているもの)では、FITの方がKFDよりも多く記述していた(KFD6.7%、FIT30%)。

「希望・予測」(相手や自分に対して希望や予想を記述しているもの。例:「私は将来両親のようにはなりたくない)についての記述が両技法で数名みられた(KFD20%、FIT16.7%)。その下位分類では、「今」(現在の相手や自分に対して希望や予想を記述しているもの)と「将来」(将来の相手や自分に対して希望や予想を記述しているもの)に分けられ、なかでも「将来」に関する記述では、FITよりもKFDの方がわずかに多かった(KFD16.7%、FIT6.7%)。

2. 心理アセスメント法としての動的家族画と家族イメージ法

心理アセスメント法としてのKFDとFITの違いを明確にするため、両技法から読みとることのできる家族の特徴についてまとめた。

1) 動的家族画の描画内容の分類

KFDでは、対象者によって異なった家族の場面が表現されていた。そこで、描画がどのような場面を表現しているのかを分類した(表5)。

対象者のほぼ全員が、家族メンバーが全員そろって登場している「集合」場面を描いていた(86.7%)。ま

た、家族が全員そろっていることに加えて、家族メンバーの役割が明確になっているものが13.3%みられた。いずれの場面も家族の日常的場面が描かれていた。

表5 KFDの内容の分類

分類(大)	分類(小)	割合
集合 86.7%	団らん	26.7%
	食事	23.3%
	ドライブ	10%
	睡眠	10%
	旅行	6.7%
	散歩	3.3%
	外食	3.3%
	遊び	3.3%
役割 13.3%	食事の準備	6.7%
	掃除	3.3%
	肩車	3.3%

2) 動的家族画と家族イメージ法から読みとることのできる家族の特徴

両技法で表現された内容を詳細に分析し、それぞれが示す家族の特徴について分析した。分析項目の中で両方に共通してみられる項目に「距離」と「向き」がある。FITにおける「距離」は図8のように、シール間の距離を0.1cm単位で測定したものを指す(図8)。これは心理的距離(対象者が感じている関係の親密さ)を表している。「距離」がもつ意味は対象者に直接教示されないため、無意識的な心理的距離(対象者が感じている関係の親密さ)が表現されやすいとされている。

また、図9のようにKFDにおける距離もFITと同様に家族メンバー間の距離を示すが、FITのように数量的な測定が意味をもつのではなく、他の人物との距離との対比から、親密性といった家族力動が読みとられてきた(日比, 1986)。

FITにおける「向き」は、シールに描かれている矢印(△や▲)がど

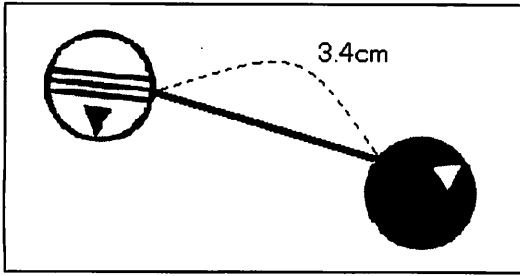


図8 FITにおける距離

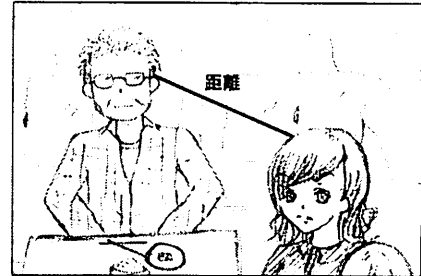


図9 KFDにおける距離

の方向を向いているかによって評定され、その家族メンバーが関心を向けている方向が表されているとされている。「向き」のもつ意味は、FIT作成時に対象者に教示されている。そのため、対象者は意識的に「向き」を決定することができる。

一方、KFDにおける「向き」は、主に家族メンバーの視線や身体が向いている方向から読みとられる。これまでの研究ではKFDの「向き」からは「距離」同様、親密性を含む家族力動が読みとられてきた。

このようにKFDとFITでは同じ分析項目であっても、それらの刺激構造に違いがある。この場合、同じような項目であってもKFDで表現された場合とFITで表現された場合では同じ意味をもたないと考えられる。そこで、心理学を専攻している大学院生2名を評定者として用い、KFDやFITの主に「距離」や「向き」からどのような家族の特徴が読みとることができるかを評定した。

①「距離」について

KFDについて評定した結果、「距離」から主に「家族のまとまり」（家族が全体としてまとまりをもっているか）、「家族メンバーの役割」（家族メンバーがどのような役割を担っているか）、「欲求」（家族メンバーがどのような欲求を抱いているか）が読みとられた。そこで、これらの結果が読みとられたKFDと同一対象者が作成したFITについて事例を示した。

a) KFDの「距離」が「家族のまとまり」を意味していると評定された

事例

KFDの「距離」によって「家族のまとまりがある」と評定された事例を示した。

図10-1は、事例A（男性）が作成したKFDであり、Aが幼稚園から小学校の時期に家族全員で寝ている場面が描かれた。「家族のまとまりがある」と評定された理由は、主に「距離」の近さが理由に挙げられた。妹が父親を蹴っているが、これによって父親と妹は身体的な接触があり、距離が近い。Aは家族メンバーがいる方向には向いていないが、父親の手がAの肩にかかっていることから距離が近い。これは「Aと妹は父親のいびきをうっとうしいと感じているが、父親に対してネガティブな感情を抱いているとは考えにくい。それは描画中で個々の動きが細かく表現され、『温かい家族』という印象を受けるためである」と評定された。さらに、家族が画用紙全体に描かれ、お互いの距離が比較的近く表現されていた。このことも「家族にまとまりがある」と評定された理由であった。

図10-2は、Aが作成したFITである。全員が「強い結びつき」を表す太い線で表されており、全体的に「距離」も近い。このことから「家族のまとまりがある」と評定された。

次に、KFDの「距離」によって「家族のまとまりがない」と評定された事例を示した。

図11-1は事例B（男性）が作成したKFDであり、本人が幼稚園の頃に家族全員で寝ている場面が描かれた。

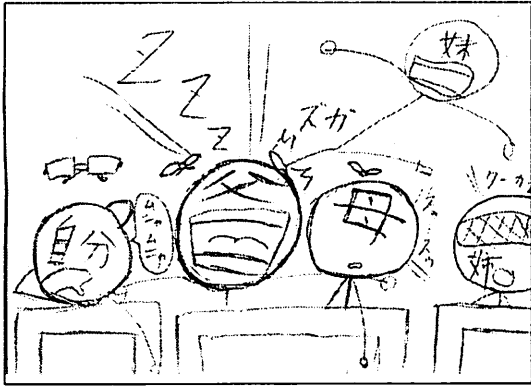


図 10-1 事例 A (男性) が作成した KFD (左から自分, 父親, 母, 妹, 姉)

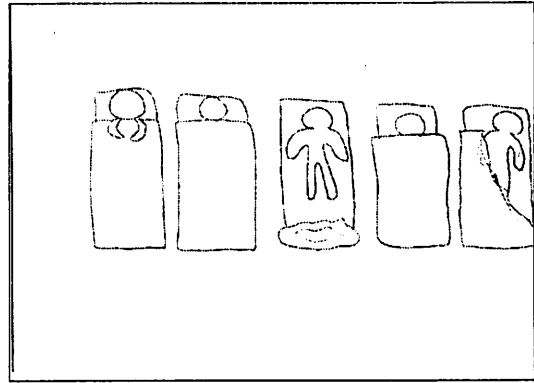


図 11-1 事例 B (男性) が作成した KFD (左から父親, 母親, 本人, 長女, 次女)

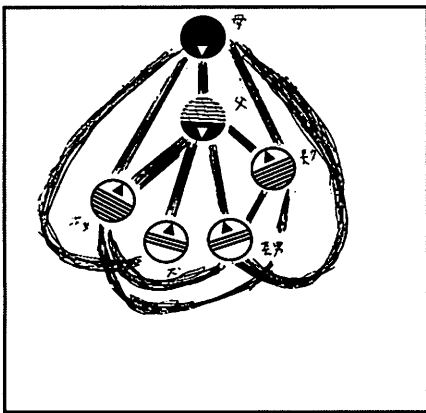


図 10-2 事例 A (男性) が作成した FIT

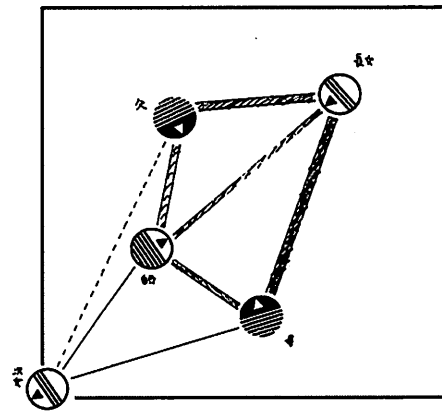


図 11-2 事例 B (男性) が作成した FIT

家族同士の身体的接触がなく、等間隔に配置されていることから「表情が描かれておらず、全体的に対象者の家族に対する親密さが感じられないため、家族同士の距離が家族にまとまりがないことを象徴しているように思われる」と評定された。

図 11-2 は B が作成した FIT である。「家族全員が互いに距離があり、まとまりがないようにも思えるが、父親、母親、長姉（長女）、本人の結びつきを表す線は太いため、しっかりとまとまっている」と評定された。また、次姉（次女）が枠外にはみ出しており、家族から外れていると評価されたが、この点は KFD では読みとれなかった。

b) KFD の「距離」が「家族メンバーの役割」を意味していると評定された事例

図 12-1 は事例 C (女性) が作成し

た KFD であり、現在の C が食事の準備を手伝っている場面が描かれた。女性 3 人が互いに近い距離で食事の準備をしており、男性 2 人が互いに近い距離で自分の好きなことをしている。このことから、女性 3 人は食事の準備を「役割」としていることが読みとられ、男性 2 人はそれに携わらない人物であると評定された。

図 12-2 は C が作成した FIT である。「距離」は家族全員が近い位置に配置されており、「家族のまとまりがある」と評定された。しかし、「家族メンバーの役割」については、FIT のどの分析項目からも読みとれなかった。

c) KFD の「距離」が対象者の「欲求」を意味していると評定された事例

図 13-1 は事例 D (男性) が作成し

